

先制自衛 第 9 章 III 1(1)(b)

- 抽象論の限界——程度問題
 - [衆議院予算委員会 1999 年 2 月 16 日](#)

- 行き過ぎとされる事例 1981 年のイラク原子力施設に対する攻撃
 - イスラエルによる説明 ([S/PV.2280](#), paras. 57-59)
 - 日本による批判 ([S/PV.2282](#), para. 95)
 - 批判 [安保理決議 487 \(1981\)](#)

- 攻撃が断続的な場合 9.11
 - 米による安保理への報告 ([S/2001/946](#))
 - ◇ “In response to these attacks... to prevent and deter further attacks”
←これは「先制」自衛？

- [米によるソレイマニの殺害](#) (2020 年)
 - 米による安保理への報告 ([S/2020/20](#))
 - ◇ (パラ 1) “in order to deter... Iran from conducting or supporting further attacks”
 - ◇ (パラ 2) “The actions taken by the United States occurred in the context of continuing armed attacks by... Iran”
 - [国防省法律顧問演説](#)
 - ◇ “Under international law, an imminent attack is not a necessary condition for resort to force in self-defense in this circumstance because armed attacks by Iran already had occurred and were expected to occur again.”
 - 日本政府の説明 [衆議院安全保障委員会 2020 年 1 月 17 日](#)

- 日本の立場
 - (ミサイルにつき) 攻撃宣言+燃料注入+屹立=「着手」 [衆議院予算委員会 2003 年 1 月 24 日](#)
 - 「着手」の有無は個別具体的な事情に即して判断 [参議院外交防衛委員会 2020 年 7 月 9 日](#)
 - 集団的自衛の場合 「他国に対する武力攻撃に着手した時点」 [参議院予算委員会 2022 年 5 月 31 日](#)

非国家主体 第 9 章 III 1(1)(c) —— 9.11 を例に

- 問題：非国家主体（たとえばテロリスト）に対する攻撃が同時に領域国に対する攻撃になってしまうことをどう正当化するか
- “unwilling or unable”（教科書(iii)）「現在までにこうした基準が広範に受け入れられ、確立しているということとはできない」（232 頁）
 - 肯定派
 - ◇ 米（上記安保理報告） アフガニスタンによる武力攻撃と主張せず
 - ◇ [安保理決議 1368 \(2001\)](#)
 - ◆ 米の自衛権行使に賛同？（前文）
 - ◇ [ヨーロッパ理事会 \(EU 首脳会議\) 声明](#)
 - ◆ “On the basis of Security Council Resolution 1368, a riposte by the US is legitimate.”
 - ◇ [米州機構常任理事会決議 796](#) パラ 4
 - ◇ NATO 事務局長声明 ([Press Release \(2001\) 138](#)) “NATO Ambassadors... expressed their full support”
 - 否定（懷疑）派
 - ◇ ベラルーシ ([A/56/PV.12](#), p. 21: “The possibility of any military intervention...”)
 - ◇ マレーシア ([A/56/PV.14](#), p. 10: “[The Prime Minister] was against the use of force...”)
 - ◇ [イスラム協力機構 2001 年 10 月 10 日外相会議声明](#)パラ 11
- では、どうすべきか？